

隠す

1. 泡の中の虫

草木の新芽の成長が止まるころ、茎に白い泡の塊が目につき始めます。緑の中の白色は注意を引きますが、触るのもためられる代物です。枯れ枝か何かでもって、泡を取り除いてみましょう。腹部の赤い、ひし形のような虫が出てきます。

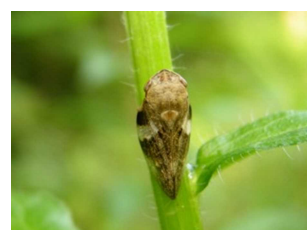
アワフキと呼ばれるグループの幼虫です。成虫にならないとほとんどが種を判定できません。半翅類といわれるセミやカメムシの仲間ですので、成虫、幼虫とも植物の汁を吸って生活しています。幼虫は翅がなく飛んで逃げるができないため、泡の中に隠れると都合が良いのです。この泡の元はいわば幼虫の尿です。幼虫は植物の道管(根から吸い上げた水が通る管)に口針をさして吸い、その中のわずかな栄養で生きています。その結果、排泄する大量の水の中にあるアンモニアや分泌する脂質、タンパク質を自らの呼吸で使った空気で泡立て、丈夫な泡を作ります。石鹼水の中にゼラチンを加えると、丈夫なシャボン玉になることと同じです。葉で作られた糖が通る師管からは吸っていませんので、アブラムシのように甘い排泄物ではありません。アリは来ないどころか、泡にまみれると死んでしまいます。二重のバリアーです。6月になるとこの泡は見えなくなり、成虫となったアワフキは目立たない存在となります。



アワフキの泡の塊

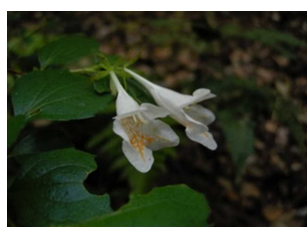


泡の中のアワフキの幼虫

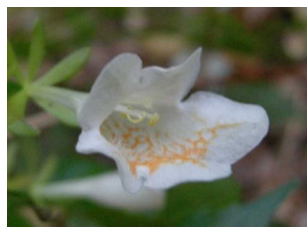


シロオビアワフキの成虫

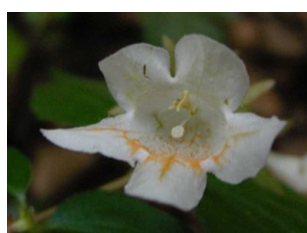
2. ツクバネウツギの花



対生の花



ツクバネウツギの花



めしべとおしべ

名前のツクバネは「突羽根」の意味で、5枚の萼片(がくへん)が果実の先に秋まで残り、羽根突きの羽根のように見えることから命名されています。果実の根元から取って落とすとくるくる回ってゆっくり落下する、秋ならではの遊びです。

花は5月に新しく伸びた枝の先に2個ずつ付いています。葉のつき方の対生と同じです。薄黄色の華やか花は目立ち、日当たりの良い場所を好む低木のため、遊歩道や開けた場所など人が歩くところで開花しています。花は細い筒状部分から急に膨れ、先端は浅く5つに割れて開き、中にオレンジ色の葉脈状の模様があります。

この花は昆虫を呼ぶために、花筒の底に蜜を分泌しています。コマルハナバチなど長い口唇をもち、蜜と花粉を必要とするハナバチ類が頭から潜り込んでもがいています。隠している蜜であっても存在を知らせる必要があり、遠くから昆虫に発見させるための模様があります。長い筒は花粉を無理やり運ばせるための装置で、中心のめしべの上側におしべがあり、潜れば必ず花粉が付いてしまいます。しかし、クマバチは花筒の横をかじって穴を開けて蜜だけを盗み、花粉運搬をしません。植物も対策を考えているのでしょう。

(倉吉博物館専門委員 國本洸紀 2017)